

小学校教師による小5社会科“森林資源”の教材研究—1枚の写真を通して

木を伐ることによって守られる森林

作成：橋本祥夫（はしもと よしお／京都教育大学附属京都小学校 教諭）

寸評：山下宏文（やました ひろぶみ／京都教育大学 教授）*

語り：「トラックいっぱい木材が積まれていますね。この木材はどこに運ばれるのでしょうか？」

この木材は、石川県能登産のスギで、中国に輸出されます。中国では経済発展に伴い、木材の需要が増えているそうです。

こんなにたくさん木を伐っても大丈夫なのでしょうか？」

木を輸出する会社の社長さんは、「これで森林荒廃に歯止めがかかる」と意気込んでいて、これからは輸出を増やしていくそうです。

どうして、木を伐って輸出することが森林荒廃に歯止めをかけることになるのでしょうか？」

一部の木を伐採することで残った木の生長を促し、森林の健康を守ることを間伐といいます。間伐しなければ木の根付きが悪くなり、大雨が降ったときに土砂災害を引き起こすことがあります。

また、森林を伐採しないと、新たな人工造林ができないので、若い森林が減少します。若い森林のほうが二酸化炭素を吸収したり酸素をつくり出したりする働きが大きいので、伐採をしないと、森林の働きが低下します。特に、地球温暖化が進む中、このような森林の働きが低下していくのは困りますね。



▲金沢港から中国へ輸出される能登産のスギ＝輪島市三井町（写真：平成19年5月9日付け、北國新聞ホームページから）

日本は、国土の約2/3が森林であるにもかかわらず、自給率は年々減少していて、外国からたくさん木材を輸入しています。日本の森林を守るためには、木を伐らないようにするのではなく、国内の木材の需要を高めて、間伐をしていくことが必要なのです。

意図（橋本）：「森林を守る」といえば、子どもたちは「できるだけ木を伐らないようにしたほうがいい」と考えることが多い。確かに熱帯雨林地域などでは、森林伐採のために森林面積の減少が問題となっている。しかしわが国では、木材の需要が減り、間伐があまり行われなくなり森林が荒廃し、森林が持つ公益的機能が低下しているので、間伐をもっと行わなければならない状況である。「木を伐ることがどうして森林を守るにつながるのだろう」という、子どもにとっては矛盾するような問題を提示することで、森林問題に関する問題意識を持たせることができるとともに、日本における森林の現状を正しく認識させることができる。また、国土の約2/3が森林であるにもかかわらず、木材の自給率が低く、世界第3位の木材輸入国であることも、子どもの問題意識を喚起できる学習問題となる。

寸評（山下）：小学校第5学年社会科における「森林資源」の学習において、今、求められている教材のあり方を提示してくれている。「森林を守る」＝「木を伐らない」というあまりにも単純な構図から、早く脱却することが必須である。最近になって、ようやく教師にも、その意図が理解されるようになってきたように思う。

*山下…〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1 Tel 075-644-8219（直通）